

藤沢市総合教育会議 議事録

会議名	令和6年度第2回 総合教育会議
開催日	2025年（令和7年）1月16日（木）14:00～15:15
場 所	本庁舎6階 会議室6-1
出席者	（市側）鈴木市長 （教育委員会）岩本教育長、飯盛委員、種田委員、石井委員、井沼委員 （関係職員）教育部長、教育部参事、教育総務課長、同課主幹、同課上級主査、教育指導課長、同課主幹、同課指導主事、教育文化センター長、学校教育相談センター長、学務保健課長、同課課長補佐

事務局（司会）

- ・ 定刻となりましたので、ただいまから令和6年度第2回総合教育会議を開会いたします。
- ・ 会議を開会する前に、皆様にお願いがございます。携帯電話については、電源をお切りになるか、マナーモードに設定をお願いいたします。
- ・ 次に、本日の傍聴人の皆様で録音、録画、写真撮影を行う予定の方がいらっしゃいましたら、挙手をお願いいたします。（なし）
- ・ それでは、会議の記録のために、事務局で録音と写真撮影をさせていただきますので、ご了承いただければと思います。写真撮影の際には、傍聴の方が写らないように配慮いたしますので、よろしくお願い申し上げます。
- ・ 続きまして、総合教育会議の開催にあたり、本会議の目的について改めて確認させていただきます。この会議の目的は、市長と教育委員会が十分な意思疎通を図り、本市の教育の課題やあるべき姿を共有し、次代を担う全ての子どもたちを市全体で見守り、育む取組を共有する場です。
- ・ それでは、開会にあたり、総合教育会議の座長である鈴木市長に一言ご挨拶をお願いします。

鈴木市長

- ・ 教育委員会の皆様、明けましておめでとうございます。今年もどうぞよろしくお願いいたします。
- ・ 今日には総合教育会議にお忙しい中ご出席いただき、誠にありがとうございます。新年を迎え、新学期も始まり、子どもたちが元気に登校している姿を見て非常に嬉しく思っています。しかし、一方でいじめや不登校の問題も依然として散見されています。子どもたちの成長がまちの活力につながることを考え、皆さんと協力しながら子どもたちの元気のために頑張っていきたいと思っております。
- ・ 本日のテーマは「安心できる教室」ということで、教室における心理的安全性の大切さについて、学校法人湘南学園の学園長、住田昌治様にお越しいただき講演をいただきます。大変意義のある講演になると期待しています。皆さんと共有しながら、より良い教育の向上に努めていきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

事務局（司会）

- ・ ありがとうございます。続きまして、事務局から本日の資料の確認をさせていただきます。
（資料確認）
- ・ それではここからは座長である鈴木市長に進行をお願いしたいと思います。

鈴木市長

- ・ しばらくの間、議長の任を務めさせていただきます。まず、議事録の署名人について、事務局から説明をお願いいたします。

事務局（司会）

- ・ 議事録署名人につきましては、鈴木市長と岩本教育長にお願いしたいと思います。

鈴木市長

- ・ では、署名人の決定についてご異議がなければ、よろしくお願いいたします。
（意義なし）
- ・ 次に議事の４（１）について、事務局から説明をお願いいたします。

事務局（司会）

- ・ 今回の議事のテーマは「教室における心理的安全性の大切さ」についてです。
- ・ 心理的安全性とは、集団の中で自分の意見や気持ちを安心して表現できる状態を指します。心理的安全性が高い状況では、質問やアイデアを提案しても受け止

めてもらえると思えることができ、思いついたアイディアや考えを率直に発言できます。

- ・ 近年、心理的安全性の考え方を学校や教室に活用することが注目されています。教室の心理的安全性が高いと子どもたちの関係性が良くなり、子どもが発言・発表しやすくなり、その発言に触発されて新しいアイディアが生まれるなど、学びが深まると考えられています。
- ・ 本日は「安心できる教室の作り方」というテーマで、教室での心理的安全性の必要性や効果について、湘南学園の学園長、住田昌治様からご講義をいただきます。その後、委員の皆様からのご質問や意見交換なども行いたいと思います。
- ・ 住田先生のご講義の前に、先生の紹介をさせていただきます。
- ・ 住田先生は、横浜市立小学校の校長等を歴任された後、令和4年度から本市に所在する学校法人湘南学園の学園長を務めていらっしゃいます。
- ・ また職員や児童生徒が自立自走するための学校組織マネジメントリーダーシップ、教員の働き方等についての執筆や、全国各地での講演といった活動にも精力的に取り組まれていらっしゃいます。それでは住田先生、よろしくお願いいたします。

住田先生

- ・ 皆さんこんにちは。住田でございます。
- ・ ご紹介いただきましたが、私は横浜市で長年勤務しておりました。実際には藤沢市に約35年住んでおり、子どもたちも小学校と中学校で藤沢市にお世話になっています。
- ・ 湘南学園に勤めてからは、藤沢市の管理職研修や湘南三浦地区の管理職研修にも携わっており、長い間藤沢に住んでいることから、藤沢市に何らかの形で貢献したいという思いを持っています。今日もそういう思いで務めさせていただきます。
- ・ お配りしている資料についてですが、本当に直前まで悩みながら作成したため、つい先ほど完成したばかりですので、事前にお配りした資料ではなく、プロジェクトの投影を中心にご覧いただければと思います。
- ・ 今日のテーマについて、「心理的安全性」や「安心できる環境」といったキーワードがありますが、まずお伝えしたいのは、現在の学校現場は圧倒的にコミュニケーション不足であり、対話の機会が非常に少ない状況です。さまざまな理由がある中で、子どもたちの声に耳を傾ける余裕がないというのが、今の学校現場の現状です。
- ・ このような中で、どうすれば安心できる教室を作れるのか、今日はその点についてお話ししながら、皆様のご意見も伺いたいと思っています。
- ・ さて、安心できる教室についてですが、子どもたちや学校の現状はどうなっているのでしょうか。

- ・ 先ほど鈴木市長からお話がありましたが、いじめや不登校、自殺といった問題は深刻で、最近のデータによると不登校の子どもたちが35万人に達しようとしています。これは年々増加している状況です。
- ・ 文部科学省では、不登校の子どもたちが教員に相談した内容を調査しましたが、学校生活に対するやる気が出ないことや、不安や抑うつの状態、生活リズムの乱れなどが影響していることがわかりました。これらはコロナの影響もあるかもしれませんが、また、保護者の意識の変化なども要因として挙げられます。特別支援に関与する部分にも影響が出ていると思います。
- ・ このような状況の中で、不登校の子どもたちが学校に足を運ばない、あるいは学校に来て保健室に行くなど、教室に入れない子どもたちが増えています。「安心できる教室作り」というテーマはあるのですが、学校に来て本当に安心して過ごせるのかなということが、大きな課題になっています。
- ・ それに加えて、さらに驚くべきデータがあります。教職員の精神疾患による病休者が7000人を超えたという現実もあります。7000人と言いますが、実際には一部に過ぎません。長期ではないものの、1ヶ月程度お休みを取っていたり、病院での投薬治療を受けたりしている教員が大勢います。
- ・ これらの教員が抱える1番の問題は、児童生徒に対する指導そのものに関する、子どもたちとの関係がうまく作れていないということに起因しています。信頼関係であったり自分が思うような学級運営や授業ができなかったりという悩みがあるということです。
- ・ さらに2番目にあるのが、職場内の対人関係や事務業務に関するストレスも、教員が抱える悩みの一因です。こうした状況が、子どもたちを支えるべき教員たちが学校に足を向けられないという苦しい状況を生んでいます。
- ・ したがって、子どもたちのことを考えると同時に、最も身近に関わっている教員たちのケアをどうするかという視点も非常に重要だと思います。
- ・ ここで、心理的安全性とは何かを調べてみました。
- ・ ハーバード・ビジネススクールのエイミー・C・エドモンドソン教授によれば、心理的安全性は「個人が不安や恐怖心を感じることなく、自分自身の考えを表現し、失敗やミスを正直に話し合うことができる状態」と定義されています。平たく言うと、恐れや不安がなく、自分の言いたいことが言え、やりたいことができ、それを認めてもらえる状態が心理的に安全な状況です。このような状態が教室の中にあるのだろうか、または学校の中にあるのだろうか、職場の中にあるのだろうか、という視点がすごく大事なのだらうなと思っております。
- ・ さて、学校における安心できる教室についてお話しする中で、どうすればそのような教室を作れるのか、独りよがりになってはいけないと思い、湘南学園の幼稚園から高校までの教員に意見を聞いてみました。
- ・ いただいた回答をまとめたところ、まず最初に出てきたのが「自由な発言と受容」です。先ほどお話したように、言いたいことが言え、しっかりと聞いてもらえるかということや、いじめがないかというようなことです。

- ・ 次に挙げられたのはコミュニケーションの重要性です。先生が自分たちの話を聞いてくれる、友人同士でしっかりとコミュニケーションを取ることが必要です。先ほども話したように、現在はコミュニケーションが圧倒的に不足しており、職場や教室内でも、忙しすぎるカリキュラム・オーバーロードによる影響が顕著になっています。コミュニケーションの不足はとても大きい問題です。
- ・ また、居場所の確保も重要な要素です。一人ひとりが「自分がここに居ていい」と感じ、「一人ひとりの居場所」がここにあるかどうか大切です。不安や落ち着かなさを感じるものがない、居心地の良い場所が学校や教室にあるかどうか問われます。
- ・ 整理された環境も重要です。乱雑な教室では安心感が得られず、ある程度の整理整頓やルールが必要です。このような環境が整っていることで、安心できるのではないかとされています。
- ・ そしてやはり、信頼関係。教職員と生徒の間には、しっかりとした信頼関係が必要です。「なあなあ」の関係ではいけません、教員と子どもたちの関係性をきちんと築いていくことが重要です。
- ・ その際、権威主義的にならず、先生が言った通りのことをやらせたり、大人の都合で何でもやらせたりせず、ある程度フラットな関係の中で、子どもたちとの信頼関係を築くことが理想的な教室の条件だと考えています。
- ・ 私の学校の教員たち、幼稚園から高校までの先生方がこの点について意見を出してくれました。学校によって少し差異はあるかもしれませんが、共通することとして出てきた意見です。
- ・ 少しまとめますと、安心できる教室とはどのようなものかを考えると、自由で受容的な環境だということです。
- ・ 受け入れてもらえるかどうかは非常に重要で、何を言ってもみんながちゃんと聞いてくれるか、認めてくれるかという不安感多くの生徒が持っています。また、自分がここにいていいという居場所があるかどうか、整理されているかどうか重要な視点です。
- ・ どういう場所が居心地良い場所かということは、人によって異なるかもしれませんが、自分にとっての居心地の良い場所がそこにあるのか。さらに、教員と生徒の信頼関係も大切です。教室に入ると感じる空気感や温かさは、安心感につながります。私たちも教室を巡回する中で、そのような安心感を感じることもあります。
- ・ 次に、安心できる教室をどのように作っていくかということを探ったところ、やはりまず最初に出てきたのが「安心できる環境の構築」です。環境面はもちろんですが、子どもたちが安心を感じるためには、認めてもらえるということが一番大きな要素です。自分の意見を言える環境、自分のやりたいことをやれる環境が整っているかどうか重要です。
- ・ また、どの子にも素敵な面がありますが、往々にして苦手なところやマイナスの部分に目が行きがちです。本来は、すごく素敵なところ、素晴らしいところ、いいところを、ちゃんと引き出していくような、そういう教師の関わり方が必要で

す。こうしなきゃいけないということではなく、大人の都合でもないということです。

- ・ さらに、重要な事として「コミュニケーションの問題」も課題として出ています。安心できる教室を作るためには、どのようにコミュニケーションを構築していくかが大きな課題です。
- ・ あとは、ルールの設定と合意形成も重要な要素であり、これは4月の初めに児童・生徒たちとしっかり話し合い、ルールを合意形成するプロセスが求められます。一方的な押し付けではなく、みんなで話し合いながらルールを作っていくことが大切です。納得感のある教室作りをしていくということです。
- ・ また、多様性の尊重と支援も重要です。様々な子どもたちがいる中で、それぞれの意見や考えを受け入れる姿勢が必要です。排除することなく、きちんと受け入れつつ、寄り添う姿勢。その中で協力的な環境を作ることができるのではないかと、ということが上がっていました。
- ・ 個々の特性を尊重することが大切です。今、「個別最適な学び」と言いますが、学びだけではなく「個別最適な暮らし方」、それぞれ子どもたちに合わせることから考えていく。それぞれの特性をしっかりと理解していくということが必要になっています。
- ・ コミュニケーションが重要であり、協力関係を築くためには、教職員が個々の特性を理解し尊重するためのゆとりが必要です。教職員が忙しく、子どもたちの話を聞く余裕がない状況では、理想的な教室作りは実現しないというのが現実です。
- ・ 私がこれまでの経験から思うことの一つは、市長も先ほどおっしゃっていましたが、今の学校現場において、教職員や子どもたちが元気かどうか、というのは大きな問題だと思います。本当に元気であるのかな、というところをしっかりと確認していかなければならない。これだけ変化が激しい世の中ですが、その中に飲み込まれてしまいそうな状況の中でも、みんな元気であるのかな、ということです。
- ・ また先ほど多様性の話をしましたが、全員が異なることを大前提に、お互いを認め合い、ケアと対応をしっかりと行いながら、学校作りを進めてきました。これを一言で言うと「ケア」という言葉になると思います。心理的安全性という概念も学校現場ではあまり使われてきませんでしたし、「ケア」の言葉も医療現場ではよく用いられていますが、教育現場でもこういう言葉を積極的に使っていく必要があると感じています。
- ・ 違いを認め合うことが大切です、職場でも教室内でも、子どもたち同士が声を掛け合う、気に掛け合う関係性をしっかりと作っていく、ケアリングを大事にするということが、今こそ学校現場に必要なと思います。ケアという言葉が学校現場にも広めたい。そうすると押し付けるような教育ではなく、子どもたちの声をしっかりと聞き、寄り添う形での教育、エンパワーすると言いますけど、そういうような形が出来上がっていくのではないかなと思います。

- ・ ケアというのは、各自の得意なことや苦手なことを理解し合い、互いに補い合っ
て助けるよ、ということだと思います。それに対し、ありがとうという気持ちを持
ちながら関係性を作ることが、子どもたちの安心感に繋がっていきます。その
ためには、先生たちがしっかりと支援することが重要になります。
- ・ 例えば、私たちは「カラフルな学校づくり」という取り組みをしていて、子ども
たち同士の寄り添いの場を作っています。
- ・ スライドの上部は6年生と1年生の関わりの写真です。1年生は小学校に上がつ
たばかりで不安を抱えていますので、6年生の寄り添いで、だんだん安心感を持
つようになっていきます。これは多くの学校で行われていると思います。
- ・ スライドの下部は、教員が子どもたちに寄り添う姿です。子どもたちが困ったと
きに、いつも先生がこうやって横に並んで話を聞いてくれる。さらに、下部の真
ん中の写真ですが、高校生が小学校の教室に訪れて勉強を教えたり、高校生が幼
稚園で実習を行ったりする場面もあります。安心感を持つためには、こうした人
と人との関わりが、大事になってくるという気がしますし、温かい場を作ること
は非常に重要だと感じています。
- ・ 私たちは、子どもたちが安心して自分を表現できる環境を整える必要がありま
す。
- ・ ただし、嫌がることを無理矢理させることは良くないでしょう。そもそも勉強っ
てというのは「強いる」と言います。最近「学び」と、言葉として変えてきていま
すけれど、みんな嫌がるし、嫌だと子どもたちが言うのであれば、どうして嫌な
のかとか、なぜそう思うのか、どうすればよいと思うのかをしっかりと聞いてい
くことが大切です。子どもの声に耳を傾けることが重要です。
- ・ また、子どもたちが当事者として決める経験も重要です。これが先ほどの「元
気」につながります。他人から言われたことをただやるだけでは、大人もそうで
すが、元気になれません。自分で選び、自分で決めることが大切な経験になりま
す。幼稚園の保護者懇談会では、家庭でお子さんがどの程度自分で選んだり決め
たりできるかを問いかけています。「お母さんがこうしなさい、ああしなさいと
言っていないですか？」という質問です。
- ・ これは学校でも家庭でも同様です。子どもたちは生まれた瞬間から人格を持つ人
間であり、彼らには権利があります。自分の意見を持ち、本来はどうしたいのか
を決めることが重要です。
- ・ そのため、学校では授業や学級作りの中で、子どもたちがどれだけ自分たちで決
めたり選んだりできるかを、教職員が考えることが重要となります。
- ・ これからは何でもかんでも先生が決めることは必要ないと思います。そうしない
と、子どもたちの元気や主体性を奪うことになるだろうと感じます。やはり自ら
決める経験はとても大切です。
- ・ 私の教え子に、田臥勇太というバスケットボール選手がいます。彼が小学生の頃
に横浜の小学校で教えました。
- ・ 彼が広告で言っていた言葉は、「正解はない。大切なのは自分で選ぶことだ。自
分の選択を成功にするのも自分なので」というものでした。

- ・ この話をすると少し長くなってしまうのですが、自分が選ぶ、決めるという、人生において重要な選択の時に、自ら選択することによって結局彼は夢を実現していきます。夢を実現していく人は、夢を諦めないでずっとやり続けるから夢が実現すると、よく言いますけれども、やはり自分で選ぶことはすごく大事なのだと思います。
- ・ 例えば挫折を当然しますが、挫折したときにも、自分が決めた事であればそれを乗り越えていけると、またそれが何か自分のエネルギーになっていくと、よく言っていました。
- ・ したがって、子どもたちの元気だとかモチベーションをしっかりと保っていくために、私たち大人は、子どもたちが自分で決めたり選んだりすることをしっかりと保障する必要があります。自分が決めた経験の積み重ねが、メンタルを強くすることにも繋がるとも言っていました。
- ・ これはよくわかると思いますが、誰かが決めてうまくいかなければ、他人のせいになります。そうすると、どんどん他人のせいにし、自分の責任逃れをしていきます。当然自分自身が乗り越えた経験がない分メンタルが弱くなっていきます。
- ・ 言ったとおりにやらせたらいいような感じがしますが、結果的にそれは子どもたちのメンタルをどんどん弱くしていくことになると思うのです。失敗を恐れずとよく言いますが、自分たちで決めることを大事にすることで、結果的に子どもたちが元気になり、その中でみんなが安心できる状況を作ることができると思います。
- ・ したがって、安心して自分の意見を発信できる環境をどう作るのが非常に重要です。
- ・ 「聞く」という言葉と「聴く」という言葉が二つありますが、よく言われるのは、前者は善悪や白黒の判断をしながら聞く聞き方であり、後者は判断を保留してジャッジせずに聴く聞き方であると言われています。
- ・ できれば、後者の「判断を保留して聴く」ことをしていくこと、つまり、コミュニケーションの中で、先生が子どもと話すときに「それは駄目だ」や「いいね」と決めつけるのではなく、「どうしてそう考えたのか」「それをやるとどうなるのか」「どのようにしたいと思うのか」といったことをしっかりと聞きながら、判断を保留しながら聴き、その人との会話をしっかりと深めていく。そうすることによって、子どもたちの好奇心が育まれます。「どうしてなんだろう」、自分と違えば違和感があり、その違和感から「なぜなんだろう」といろいろ考えることになります。
- ・ この好奇心を持って聴くコミュニケーションが、心理的安全性を高める要因となります。簡単にジャッジメントしないことが、大切なことだろうと思います。
- ・ したがって、話を聴くとか問うとか、そして話を引き出す関係性が重要です。これは大人同士でも、また大人と子ども、子ども同士でも同様です。こうした聴き方ができるようにしていくと、結果的に主体性や安心感を引き出し、自立的にもなっていくと思います。

- ・ このような「聴くこと、問うこと、引き出すこと」は、粘り強く続ける必要があります。
- ・ 私が管理職研修でよく話すのは、校長先生が教職員に対して同様の関わり方をすることが大切だということです。大人が子どもに対して、また子どもたち同士でも、そのような関わり方によって、互いに高め合う関係性を築くことができます。
- ・ 今日は安心できる教室の話ですが、お互い高めあえる教室というのは、それはかなり活気があるとか、活性化しているという教室でもあると思います。
- ・ 傾聴という言葉があります。今コミュニケーションの話の中で、聴くことの大切さをとても感じています。話すこともそうなのですが、話し手がいる、要するに自分が言いたいことが言えるということは、話をちゃんと聴いてくれる人がいるということになります。これもクラスの中でしっかりと作っていかなくてはいけない関係だと思っています。
- ・ そのためには、良い質問をすることが不可欠です。良い質問を通じて、多くの情報とか良い答えを導くことができます。また、傾聴が不可欠です。全身で聴き、頷きながら最後まで聴くこと、心の声やその背景、どうしてそんなこと言うのかなというところまで合わせて聴くことも大切です。そしてよく見ることです。また、相手の良いところを探しながら聴くことも重要です。傾聴は相手にエネルギーを与える行為でもあり、話を最後まで聴くことが非常に重要です。
- ・ 実は、小学校2年生の国語の教科書には「人の話を最後まで聞いてから話す」という言葉が書かれています。これは大人が最もできていないことかもしれません。
- ・ 子どもたちに、このような関わり合いをしてもらおうということで、実は国語の授業で「相談に乗ってくれませんか」というような授業があります。
- ・ この授業を通じて、どのように話し合いを進めるのか、どういう聞き方をすれば相手にとって良い聞き方なのかを学んでいます。
- ・ このように子どもたちは子どもたちで学んでいます。こういう学び方をしているということを私達大人もしっかり知っておく必要があると思います。
- ・ この授業を見て本当に私自身がすごく学びました。子どもたちが本当によく聴き合っている姿に感動しました。私も学校の教職員がしっかりと聴きあえるようにしたいなと思ったぐらいでした。「人の話を最後まで聞いてから話す」ということは、実際に大人には難しいことですね。つい途中で話してしまうこともあります。
- ・ このように子どもの話をしていくと、最終的には大人の問題に行き着くということです。教職員がどう関わっていくか、教職員同士の関係はどうか、そして教職員自身がどうであるかに最終的に行き着くのです。
- ・ 実際に「幸せな教職員は幸せな生徒を作る～教職員から生徒への幸福の社会的伝染～」という論文が発表されました。

- ・ 私は前々から元気な教職員が元気な子どもを作るとか、教職員の幸せが子どもの笑顔になると言ってきたのですが、これが本当に裏付けされたなと思いました。
- ・ この論文は、去年発表されましたが、19カ国の生徒・教員18万人のデータを分析した結果、教職員に対する満足度（幸福度）が、生徒の幸福（人生満足度）、ポジティブ感情を増加させ、ネガティブ感情を低下させることがわかった、というものです。
- ・ 子どもたちは、教職員の姿を見て毎日長い時間すごしています。特に小学校は、学級担任制ですから、ずっと見ています。幼稚園もそうです。中学高校でも、いろいろな教科の先生が来ますが、やはり先生がどのような様子なのかを見ています。また、教職員同士の関係も子どもたちはよく見ています。
- ・ 小さい年齢の子たちの方が、より先生との影響を受けますから、先生たちの幸福感、元気、笑顔は、非常に子どもたちに影響を与えています。
- ・ もう一つ、これは多分この場所でも以前講演されたと思いますが、川崎の西野さん（認定 NPO 法人フリースペースたまりば理事長）も同じようにおっしゃっていました。
- ・ 「子どもの権利条例」の最終の報告で、西野さんがこれを発表しようとしたときに、当時の子ども委員の子が出てきて、ちょっと待ってくれと、ちょっと私言いたいことあるということで、「他人を幸せにできるのは今幸せな人だけです。まず大人が幸せでいてください。大人が幸せじゃないのに子どもだけ幸せになれません。」ということを言われたということです。これはもう西野さんも、頭を叩かれたような気がしたとおっしゃっていましたけれど、非常に大きな言葉だと思います。
- ・ これは学校に置き換えたら教職員に向けて言われている言葉だと思いますし、家庭であれば親が言われている言葉だろうなとも思います。
- ・ 学校だったらどうなのかと思うと、教職員が幸せじゃないと、虐待とか体罰が起きるかもしれない。先生が暴言を吐くかもしれない。子どもたちに対してきつく当たるかもしれない。冷たくするかもしれない。話をちゃんと聞いてくれないかもしれない。
- ・ 子どもは愛情を持って育まれるといいですが、「大人が幸せでいてほしいと、子どもはそういう中で安心して生きることができる」ということです。ここにもう正解のようなことを書いてくれているわけですね。
- ・ そういう中でしか子どもたちは安心できないとすれば、教室の雰囲気を作っているのは、確かにたくさんいる子どもたちですが、本当にきちんと作って整えているのは先生の存在なのです。先生のあり方や雰囲気が、安心感を生み出す要因となるのです。
- ・ 先生たちが、本当に幸福なのか、元気なのか、安心していられるのか、職場で本当にやりたいことを実現できているか、言いたいことが言えているのか。そういうことが結局、教室に伝わってしまいます。

- ・ 「職員室と教室はつながっている」という言葉は、そういう意味なんです。ですから、この言葉は本当に重い言葉だと、毎回この言葉を使わせていただいています。先日、西野さんとも本当にそうだという話をしていました。
- ・ やはり子どもたちには、学年の先生たち同士の仲が良いかというのは、とても影響します。先生たちが喧嘩していると子どもは不安でしょうがないのです。先生たちが仲良く話しをしているとか、子どものことや行事のことを話し合ったりしている姿を見て、子どもたちは安心感を持ちます。
- ・ 逆に、教職員同士のヒエラルキーがあるとか、この中であの先生いじめられてるんじゃないか、みたいなことを子どもたちも割と感じてしまうのです。そうすると、やはり大人自身が幸せでいるのか、安心できるのかどうかということ、子どもたちにとってはすごく大事な環境なのです。
- ・ ですから、教員はそもそも「教育環境」だと、すごく前から言われていますが、教員同士の関係性も大きな環境要素として子どもたちの中には伝わっていくということです。
- ・ 私はそのところをどうにかしたくて、管理職研修をしています。要するに、先生たち同士の関係性をどう作っていくのかとか、教員がハッピーであるためにどうするか。それが結果的に子どもたちに安心感や生き生きとした姿をもたらすのです。
- ・ 「教職員のHAPPYが子どもの笑顔になる」というのは、私が横浜市の働き方改革のスローガンとして提案した考えです。しかし当初は猛反対されました。「子どもが中心なのになぜ先生のハッピーなのか？」と批判されました。
- ・ でも、ずっとそうやり続けた結果、今の問題が起こっているわけですね。子どもの幸せを願わない先生など誰もいないのです。幸せを願うあまり、教職員が疲弊して、元気がなくなり、病んでいくのを見て、本当に子どもたちが元気になれるのかという疑問が生まれました。
- ・ 教職員がハッピーでいることが、子どもたちの安心感や笑顔を生み出すということは、先ほどの論文発表でもありましたが、子どもたちは大人の姿、学校での教職員の姿を見て、安心感を得たり、笑顔になったりするのだらうというので、いま加賀市で教育長をしている島谷さんと一緒に、とにかくこれだということで押しとおしたという経緯があります。
- ・ ずっと言い続けてよかったのと、今はすごく思っています。教職員がハッピーになることが子どもの笑顔になり、その笑顔を見てまた先生たちもハッピーになることも確かです。そういう何か良いサイクルがそこで生まれていくことが大事だと思います。
- ・ どちらかが駄目になっちゃったら、駄目ですね。先ほどの川崎の子どもたちが言っているように、「あの先生がハッピーじゃないのに子どもは笑顔になれない」ということだとすれば、やはりまず先生なんじゃないかということを思うところはあります。

- ・ ですから心理的安全性を高めるために、教職員としてどうするかというと、やはり笑顔を決やさないことです。一番子どもたちが心配になるのは先生たちの笑顔が失われたときです。
- ・ 特に新採用の先生です。新採用の先生は、だんだん笑顔が失われていくことがあります。そうすると子どもたちが徐々に不安になっていく。さらに、保護者も不安になっていくのです。
- ・ 笑顔があるというのはすごく大事な視点だと思います。子どもと一緒に遊ぶ時に笑顔があるかなということです。そうしていく中で子どもたちは安心して伸び伸びと力を発揮できます。
- ・ あとは、やはり雰囲気盛り上げるいい空気作りをしていくということです。そうすると新たな目標にも意欲的に取り組んでくれます。
- ・ 先生たちが本当に楽しく授業をしていたり、行事でも本当に楽しそうに先生たちが計画していたりするのを見て、子どもたちもやはり安心するだろうなと思います。
- ・ いつも笑顔でご機嫌よくいてくださいねと言っていますが、そういった場所をどう作るかも大切です。先生たち自身が癒されるということも、学校の中ではすごく大事だと思ったので、職員室にハンモックを入れました。
- ・ 真ん中の先生は、本当にベテランの先生ですが、疲れ果ててたまに休みたいということで、ハンモックで揺られながら休まれていましたし、お茶を飲んだりもしていました。
- ・ 下のスライドは、ワークショップです。先生たち同士も話し合えるっていう環境をどう作るかとなったときに、会議形式だけではなかなか難しいので、若い先生も自分の言いたいことが言えるような状況を作っていくことは大事です。
- ・ 真ん中のスライドはPTA総会なんですけど、保護者の皆さんも、教職員も一緒になって子どもたちのことを話し合います。まさにフラットな状態で、関係をどのように作っていくかということです。先生たち同士の関係性を作るためにも、先生たちの癒しの場だったり、エンパワーメントする場であったり、ケアする場だったりということもすごく大事ななと思います。
- ・ 楽しい職場を作るのが一番です。これも一つ結論だと思います。いかに先生たちが楽しめているかということだと思います。
- ・ 先生たちが、もう学校行くのはつらいとか、月曜日本当行きたくないとか思うことなく、今日はこういうことがあって、子どもたちに会ってこういうことをしたい、というような思いで学校に行けるかどうか。
- ・ その中で、先生たちとお互いに相談しながら、自分のやりたいことを言ったときに、足を引っ張るのではなくて、応援するよとか、一緒にやろうよ、とかというような職場の風土というのをしっかりと作っていくこと、それが組織の土台になるのではないかなと思います。
- ・ これは学校だけではなくて、いろいろな組織もそうですし、家庭もそうですね。土台をしっかりと作っていく、組織風土作りが何よりも大事なところで、きっと楽しい職場の学校であれば子どもたちも安心できる。そういう教室ができています。

だろうと思いますし、子どもたちも楽しく学校生活を送っていけるのではないかなと思います。

- ・ 私はいつも笑顔で機嫌良くと言っているわけですが、これも非常に大事なことで、管理職の先生には言っています。
- ・ なぜかという、「人間最大の罪は不機嫌である」とゲーテが言っています。「不機嫌は伝染していく。だから最大の罪だ」というふうにゲーテは言っています。だからこそ、我々は笑顔でいたり、元気でいたり、ご機嫌でいること。それを周りに広げていくということが大事だと思います。
- ・ 学校で言うと、校長先生が本当に幸せなのかとか、ご機嫌なのかですね。ご機嫌ではない校長先生だとすると、誰も近寄らないですね。相談しないし、話もしないし、報連相と、よく言いますが、あまり近寄って何か話したくないという状況を作ってしまう。それは要するに求心力がないわけです。常に話しかけられやすいような関係を作る必要がある。先生たちもそうです。
- ・ だからやはりゆとりが必要で、何かちょっとした空白の部分が心の中に必要なんじゃないかと思います。心が常に埋め尽くされていると、なかなかその余裕がなくなってしまう。ですから私は「校長の機嫌が悪いのも犯罪だ」とよく言って、実は「夢見る校長先生」という映画でずっと言い続けてるんですけど、そのぐらいやはりご機嫌って大事だなと思って伝えているところです。
- ・ 私が話した内容について、実は今年の7月に「ご機嫌でいるためにどうするか」という新刊を出版予定です。学校の空気を作るのは、やはり校長先生の役割です。校長先生のあり方が教職員室の雰囲気に影響し、結果的に子どもたちに伝わっていきます。子どもたちが荒れたり、落ち着きがなかったり、安心できないと感じるのは、子どもたちのせいではありません。大人がどのような環境を作るかが重要なのです。
- ・ 学校の管理職は、このことを一番感じ取り、自分自身がどのようなモチベーションで、どのようなあり方であるかを理解することが何よりも大事だと思います。
- ・ 以上で私の話を終わります。ありがとうございました。

鈴木市長

- ・ 住田先生、ありがとうございました。大変有意義な講演を聞かせていただきました。全ての教職員の方にもぜひ聞いていただきたい内容でした。
- ・ ここからは、皆さんからの質疑応答の時間にしたいと思います。まずは、飯盛委員からお願いできますか？

飯盛委員

- ・ はい、貴重なお話を本当にありがとうございました。学校の話だけでなく、人生そのものについてのお話だと感じました。私も全く同感です。
- ・ 私が教育の現場で心がけているのは「プラグマティズム」という哲学です。これは「幸せだから笑うのではなく、人は笑うから幸せになる」という考え方を、も

うずいぶん前に提示しました。この考え方と先生のお話は全く同じだなと感じながら伺っていました。本当にありがとうございました。

一つお尋ねしたいのは、「ご機嫌でいること」は大事なのですが、人間は、毎日ご機嫌でいられるわけではありません。そういった中で心がけるべきことや、できるだけご機嫌であり、しかもそれがいろんな人に伝播していくような仕組み作りについて、先生がどのように指導されているかお聞きしたいと思いました。

住田先生

- ・ ありがとうございます。今それを本に書こうかと思っています。
- ・ 実は先週、西野さんと一緒に登壇した際に、ある大学生から「先生が言ったことにモヤモヤしています」と言われました。どうしてかと尋ねると、「ご機嫌でいることは良いかもしれませんが、傷つく人もいるのではないか」とのことでした。特に病んでいる人や弱っている人が、ご機嫌な人に会うと、それが逆に辛い気持ちにさせることになるのではないかという意見でした。
- ・ この問いは私にとって初めてのもので、なるほどと思いました。ご機嫌でいることの本質について考えるきっかけになりました。自分自身、そこをもう一度問いかけて考えましたが、自分がしっかりとぶれないでいることが重要だと感じました。その中で大事なものは「受容する心」です。自分が今回のように異論を受けたとき、それを排除せずに受け止めることが、実はご機嫌につながるのではないかと思います。
- ・ 自分がイラッとしたりすることは当然ありますが、その気持ちをモニタリングし、自分自身でどう接するかを考えることが大切だと思いました。
- ・ いつもニコニコしていることがご機嫌というわけではなく、自分の気持ちをフラットに保つことが重要です。私はよく中庸という言葉を使うのですが、人と関わるときに自分の気持ちをそういう状況に常に置いておくことが大切だと思います。
- ・ 例えばすごく悩んだり困ったりしている人と話すときに、その悩みをヘラヘラして聞くのではなくて、真顔できちんと話を聞くという姿勢も必要だと思います。だから決してしてはいけないのは、否定するとか排除するとか、不機嫌でいることです。
- ・ また、オンラインでの講演中に、小学校3年生の子どもから「ご機嫌でいるのが良いというが、うちのクラスの先生は僕たちをいじめてご機嫌になっているがそれはどうなのでしょう」と言われました。
- ・ ご機嫌というのは、その人がご機嫌でいることが大切なのではなく、人を傷つけるとか、排除するとか、否定するようなご機嫌はあり得ません。他者を受け入れ、排除せず、否定せず、受け止める姿勢がご機嫌を保つ上で重要で、このように、子どもからすごく学びがあるなと感じています。
- ・ 以上です。

鈴木市長

- ・ ありがとうございます。それでは、次に石井委員の感想や質問をお願いできますか？

石井委員

- ・ ありがとうございます。私は片瀬で小さな医院をさせていただいています。
- ・ 先生がおっしゃるように、患者の話を最後まで聞いて答えることはとても大事だと常々思っています。どの社会でもそういうことは重要だと改めて感じました。
- ・ ただ、先生に一つお尋ねしたいのは、十分な時間がなく、最後まで話を伺うことができない場合、どのようにしたら良いのでしょうか？また、相手方のキャラクターや状況が難しい時、自分をフラットに保つことが難しいこともあります。そのようなときに、先生はどのようにしてフラットな心を保っているのか教えていただければと思います。

住田先生

- ・ 時間がないというのは確かにあります。理想的には、しっかりとした時間を取って話を聞くことが必要ですが、時間が限られている場合は、終わりの時間をあらかじめ決めておくことが重要です。これは保護者との話し合いでも、教職員同士でも、子どもたちとの関係でも同様です。
- ・ 本当に無制限に聞けるときは、何時まででもいいですよとなりますけど、そうじゃないときは終わりの時間を決めてあげることが、すごく大事なことだと思います。
- ・ また、フラットな心を保つことについてですが、実は先ほどの話とすごく繋がりがあって、人の話を最後まで聞くことができないのは、大人になればなるほど、経験すればするほどできなくなりますよね。子どもは結構できるんです。
- ・ 実は大人になり経験を重ねることで、さまざまな引き出しを持つようになります。そのため、話を聞く間に答えを探し始めてしまうことが多いです。
- ・ この人にはこういうことと言ってあげようとか、アドバイスやこういう答えをしてあげようと思った瞬間に、もう傾聴じゃなくなってしまうんです。どんどんその人の中に入り込んでしまい、そうすると自分の心がフラットに保てなくなってくると思います。
- ・ 私は、答えを探さないことを心がけています。そうすることで、相手の話に集中し、感情をフラットに保つことができると思います。最後まで話を聴くことについてですが、頭の中に答えが浮かばないように努力しています。その人を一生懸命見ることや、その人に対する好奇心を持ち続けることが大切です。自分に目を向けないことが大切です。話を聞いている間に、自分に意識が向いてしまうと、どうしても最後まで聞けなくなることがあります。自分の気持ちが高ぶってしまうと、つい言いたくてしょうがなくなってしまうものです。
- ・ 自分に目を向けない、答え探しをしないという聴き方をしていくことが大切だと思います。最後まで聴いて、なるほどねというぐらいで多分いいんじゃないかと

思います。答えを求められない場合もありますし。一番いいのはオートクラインを起こすことです。相談してきた人が答えを自分で見つけるのが一番いいと思います。そのために私達は聴き続けるってことが必要だなと思います。

鈴木市長

- ・ では次に、井沼委員からの感想や質問をお願いします。

井沼委員

- ・ ありがとうございます。非常に納得する部分が多くありました。私もいろんな立場で活動する中で、楽しくやることやその雰囲気を出すことが重要だと思いました。
- ・ 特に緊張感のある会議では、活発な意見が出にくいと感じています。私は、その場を和ませるように努め、相手が発言しやすい雰囲気を作るよう心がけています。時には私がわざと失敗したりして、失敗してもいいんだよ、やり続けることが大切なんだよという、雰囲気作りをしています。
- ・ また、私が心がけていることは、相手の気持ちになって考えること、そして最後に「ありがとう」と言ってもらえるような気持ちで接することが大切だと思っています。
- ・ 昨今の状況は、失敗を恐れたり、忙しすぎたりして、負のスパイラルに陥りやすいと感じています。このような状況を改善し、先生たちが優しくなれば、子どもたちも笑顔になれると思いました。

鈴木市長

- ・ それでは種田委員、お願いいたします。

種田委員

- ・ 今日本当に貴重なお話、ありがとうございました。
- ・ 最近、いじめや不登校が増えていることに心配しています。私は足に障がいがあり、義足で35年ほど生活しています。仲間の中には、幼い頃から障がいを持っている人もいて、学校時代にいじめや差別を受けたという話をよく聞きます。
- ・ その方が湘南学園に転校して、勉強を続けられたという話もありますが、今日の講演で「違いを認めること」と「ケアと対話」に非常に注目しました。違いを認め合うことはとても大変で、そのためには周りの環境づくりが必要だと思います。この違いを認めるためには、どのように考え、行動することが大切でしょうか？

住田先生

- ・ 子どもたちは大人の姿を見ています。子どもたちが持つ差別意識は大人の影響から来るものです。大人が発する言葉や、誰かを排除する行動を見て、子どもたち

はそれを学びます。ですから、大人が「差別してはいけない」と言うだけでは不十分です。大人や親がその姿を示すことが必要です。

- ・ また、今はインクルーシブという言葉をよく聞きますが、それを子どもたちが学ぶ場を奪わないことが重要です。
- ・ 違いがあって当たり前を整える必要があります。障がいのある子や外国籍の子どもたちも含め、差別しないためには、それを分けない。混ぜていきながら、誰もが共に学べる場を提供することが、教育の場で求められています。これから先どんどん進むのではないかと思います。
- ・ 多様な人々が一緒にいる場では、対立が生じるのは自然なことです。そのため、私たちはしっかりとコミュニケーションを取り、対話を通じて解決していく姿勢を大人が見せる必要があります。子どもたちの問題として捉えるのではなく、大人自身がそのモデルを示すことが大切だと思います。

鈴木市長

- ・ それでは、岩本教育長からお話をお願いいたします。

岩本教育長

- ・ 住田先生、貴重なお話をありがとうございました。先生の一言一言やスライドの内容に頷きながら、感心しながらお聞きしました。
- ・ 住田先生の書かれた文書をいくつか読ませていただき、非常にわくわくするといえますか、自分の教員魂に何か火が付いたような思いです。
- ・ 今回のテーマである「安心できる教室」は、私たちの職場に置き換えても十分当てはまると感じました。
- ・ 私も、安心できる教室はどのようなものか考えてみました。
- ・ お互いに認め合う関係やリスペクト、間違っても恥をかかない安心感のある教室、反対意見が堂々と言える対等な関係など。そして自分が役に立っているという、自己有用感、誠実に話を聞いてもらえる関係。
- ・ 信頼できる指導者がいることも欠かせません。これは怖い先生がにらみを利かせるということではなく、スポーツでいうレフリーの役割に似ています。
- ・ ラグビーのレフリーにはマイクが付いていまして、試合中にその声が聞こえてくるんです。良いプレーというか協力してくれたプレーに対してありがとう、サンキューと言ってプレーが進んでいくんですね。ラグビー見るときに、これは両チームが戦っているのだけど、レフリーを含めてこの試合を良い試合にしようっていう協力を、みんなですしているんだなってことを本当に感心します。
- ・ そんな役をする信頼できる教員がそこにいるのが大切です。町のお巡りさんみたいな役割、何か問題が起きても、この方がいるという安心感がある。そういう意味での教員がいるということは大事なことだなと思っています。
- ・ 加えて、子どもたちには友人の背景を想像できる力や、こんなことで困っているのかな、こんなことを考えているのかなという、想像力であったり、人権意識に

裏打ちされた平等やリスペクト、そして何より寛容な心を育んでいくことが大切です。

- ・ 少しのことで、パンと反発するのではなく、まず受け止められる事。子どもにとってはなかなか難しいのですが、そのようなことが必要だなと感じました。
- ・ 人間関係やコミュニケーションは、教え込むものではありません。子どもに関する事件や事故がありますと、必ず報道で、学校は何やってたんだ、何を教育したんだ、という話になるのですけれども、実際は、そういった子どもたちの能力は、教え込むものではないなと私は思っています。
- ・ 子どもたちが経験や体験を通じて学ぶことが重要です。Try and learnということです。失敗から学ぶことの方が多いただろうなと思います。
- ・ 義務教育の期間や、高校、大学、専門学校での出会いを通じて子どもたちは成長していくと思います。だから個性がそれぞれにあるのだと思っています。そうやって人格が磨かれて行くのだらう。だからこそ、安心できる場所が何より必要なのだと、今日のお話を伺って感じさせていただきました。
- ・ 特に先生のお話の中で、「幸せな教職員は幸せな生徒を作る」という言葉が響きました。
- ・ 私も、いじめや不登校の問題について日々悩む中で、自分の居る場所はすごく幸せなんだとプライドを持つことが大切だと思います。自分のクラスにプライドを持っている子は、クラスの中でたぶんいじめをしないでしょうし、居心地の良いクラスでは、不登校にはならないだろうと思います。
- ・ 教職員の不祥事についても、罰則を作るだけではなく、教職員が自分の学校や職員室にプライドを持って所属することが重要です。それがブレーキにもなると思います。
- ・ 本日のお話を通じて、自分が思っていたことが間違っていなかったと感じました。また、新たな学びも多く、感謝申し上げます。

鈴木市長

- ・ 意見や質問をいただき、ありがとうございました。私は市民生活において、安全や安心、平和、人権が重要だと考えています。これらは与えられるものではなく、やはりみんなで作り上げていくものであると、改めて思いました。
- ・ 教育現場で起こっている問題について、解決策や学びの進捗の部分に目が行きがちですが、基盤となる安心できる居場所や、教職員の機嫌の良さや笑顔といった基本的なことを皆さんと共有しながら、子どもたちが笑顔でいられるまちを目指していきたいと思います。今後ともよろしくお願いいたします。
- ・ 最後に、住田先生から一言ございましたら、お願いします。

住田先生

- ・ いじめや不祥事が確かに増えている中、私も藤沢市と鎌倉市合同で不祥事防止研修を2年間ほど行ってきました。

- ・ その中で感じたのは、自己肯定感が非常に重要であるということです。
- ・ 子どもたちや大人が自分に対する誇りを持ち、自分自身を認め、褒め、ケアし、セルフエンパワメントを行うことが重要だと思います。自分にはできる力があると認識し、自分を褒めることができれば、自尊感情や自己肯定感、自己有用感も高まっていくのではないのでしょうか。
- ・ 今の教育では、ネガティブな雰囲気が強く感じられることが多いので、もっとポジティブな視点を持ち、子どもたちに未来の可能性や夢を語ることが必要です。大人も実はすごく楽しく夢を持って行動しているみたいな雰囲気、それらがうまく相乗効果を生み出していくと、今起こっている問題は少しは解消されていくんじゃないかと思います。
- ・ 夢や希望を語るのは、学校では校長先生の役割であり、藤沢市だったら市長の役割でもあるかもしれないですね。普段はそうしたことを語る機会が少ないですが、そういったことを語りながら、光が見えるような教育が求められていると感じています。

鈴木市長

- ・ ありがとうございます。最後におっしゃられましたが、私が選んだ今年の漢字も「光」です。皆さんで夢と希望を語れるように頑張っていきましょう。
- ・ それでは、議題4(2)の「その他」に関して、事務局から何かございますか？

事務局（司会）

- ・ 議事として特にありませんが、次回の総合教育会議についてご連絡いたします。
- ・ 次回は年度が変わりまして令和7年度となります。日程については現在未定ですので、改めてご案内いたします。また、総合教育会議で取り上げたいテーマがあれば、事務局へご提案いただければと思います。よろしくお願いいたします。

鈴木市長

- ・ ただいま事務局から説明がありましたが、運営上のことでご意見がある方はいらっしゃいますでしょうか。もしなければ、私の役目はこれで終了させていただき、事務局に進行をお願いしたいと思います。

事務局（司会）

- ・ 以上をもちまして、令和6年度第2回総合教育会議を終了いたします。ありがとうございました。

2025年（令和7年）3月21日

この会議の経過を記載し相違ないことを確認する。

藤 沢 市 長

鈴木恒夫



藤 沢 市 教 育 長

岩本将宏

